

貴崎の地名の由来

「播磨鑑」
「林崎村郷土史」(大正8年)
による

林崎港の西の崖上(岸崎)に「ちりんどう」と呼ばれる小さいお堂が建っています。これが「林神社の御旅所」といわれる「貴崎神社」です。この貴崎神社には様々な伝説が残されていますが、その中に貴崎“きさき”という地名のもとになっているであろうお話があることをご存知でしょうか？

その中でも多く知られているであろう話をここでふたつご紹介します。



林神社



貴崎神社



由来が書かれた案内板



昔、このあたり(岸崎)に西窓后・東窓后(にしまどのきさき・ひがしまどのきさき または せいそうこう・とうそうこう)という二人の美しい后が住んでいて、沖合に住む足の長さが8~10メートルもある巨大な大ダコが、その女性たちを我が物にしようと狙っていました。一日中タコに狙われて気の休まる暇もなく困り果てていた二人を助けたのが浮頭三郎左衛門(うきすさぶろうざえもん)という人物でした。一計を案じた三郎左衛門は大きな蛸壺に大蛸を誘い込んで足を切り落とし、山伏に化けて陸に逃げた大蛸を林神社の近くまで追い詰め打ち倒しました。

切り倒された大蛸はその場に座りこみ、そのまま大きな石となってしまいました。その石はのちに「立石」と呼ばれその石の下から湧き出した清水は「立石の井」と呼ばれるようになりました。



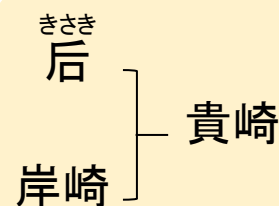
ちなみに、「立石の井」は、現在も林神社の鳥居前から北東70メートルほどのところにあります。

また、大蛸が山伏に化けた所は「山伏塚」(東松江※にある大歳神社)として祀られています。(※校区が違いますが、ご興味があれば足を運ぶのもいいのではないのでしょうか。)

この伝説の、二人の「后」(きさき)が住んでいたところの「岸崎」から、「貴崎」の地名が生まれたと言われています。



この伝説の二人の後にちなんで作成された、貴崎幼稚園・貴崎小学校50周年で登場したキャラクター「きいちゃん・さきちゃん」です。



また、推古天皇即位11年(603年)、当麻皇子(たえまのみこ)が征夷大將軍となり、新羅を征伐するために出征する新羅政途(しらぎせいと)に出かけましたが、同行していた皇子の妻(妃)である舎人姫(とねりひめ)が旅の途中で亡くなられ、妃を葬ったこの地を「后崎 または 貴崎(読みはともに「きさき」)」と呼ばれるようになった、とも言われています。